

えぐね

※えぐねは、日本三大散居村の地、胆沢扇状地の屋敷の北西側に杉・栗・桐などの木を森のように植えて、冬の季節風から屋敷を守る防風林である。杉は建築材に、落葉は燃料や肥料などにも使われた。冬は温かく、夏は涼しく、緑豊かで快適な住環境を形づくるとともに、日本の原風景を代表する豊潤な景観を生み出している。

朝の10分間を充実したものに!

胆沢中学校の朝は、10分間の朝自習から始まりまず。基本は読書、そして月一回は視写と新聞スクラップに取り組みます。11日には、第一回目の視写が行われました。今回のお手本は校歌でした。

初めて視写に取り組む1年生の教室には、4クラスすべての黒板に政江先生のわかりやすい説明が書かれていました。

「簡潔な言葉で示す」。これは結構難しいことで、授業をする上でも常に心がけていかなければならないことだと私は思っています。文科省のホームページには、視写の効果について次のように書かれていました。

集中力が身につく字が上手になる。文章表現の技法を覚える。表記のルールを覚える。暗誦や記憶に役立つ。

また、毎日続ける根気、時間内に終わらせる計画性、手本や文章を正確に読み取る注意力、丁寧に書き続ける集中力・

持続力、書き終えてから点検する自己省察力といった力も伸びるといわれており、視写はまさに良いこと尽くめの学習活動といえます。

読書、新聞スクラップ、視写のルーティンで一日の始まりを落ち着いた雰囲気でも過ごすことで、よりよい流れで授業に入ることも期待できます。朝の10分は、「たった10分、されど10分」です。これぞ「塵(ちり)も積もれば山となる」。是非自分を高めるためにしっかりと取り組んでほしいと思います。



入会式、部見学、そして仮入部へ

昨年はできなかった入会式での実技による部紹介を、今年はコロナ対策を徹底して行いました。



アフターコロナを見据え、昨年度できなかったことを工夫して出来るように、また出来ないのであれば別の方法を考え実施することで胆沢中学校の伝統をつなげ、さらにより良いものにしていく努力を続けていく、そんな1年になりそうです。

今年度の職員を紹介します③



特別支援教育支援員

吉川正夫

杉山真愉子



適応支援相談員

菅原春子

瀬谷ゆきえ



用務員

及川浩一

小川原秀紀

この6人は、まさに縁の下の力持ち的存在です。胆沢中学校の教育活動をしっかり支えています。

授業参観、PTA総会を中止します

先日文書でお示したとおりです。コロナ感染拡大を受け、やむを得ない措置と考えます。授業参観はまた別の機会もありますが、PTA総会は紙面表決とさせていただきます。役員選考については、追って連絡いたします。引き続き不要不急の外出を避け、感染のリスク回避に努めていきましょう。

学級連絡網を廃止しました

昨年度もほとんど活用されたケースがなく、緊急時の連絡はマチコミメールでほぼ事足りていたことを受け、今回の決定となりました。部活動によっては必要などあるかと思っておりますので、個人情報の扱いに十分留意した上で作成・運用いただくようお願いいたします。尚、マチコミメール未登録の方には、直接電話等でご連絡を差し上げますのでご安心ください。かつては必要不可欠なものであった学級連絡網ですが、時代の変化によってその役目を終えつつあるようです。これからも「これって必要?」という柔軟な視点をもって、教育活動の見直しや改善に努めていきたいと思っております。

差別や偏見、ヘイトがない社会を目指して

コロナのクラスターが発生した、ある介護施設の職員の方のお話を紹介します。

「人と人が接触しないのが一番だが、利用者の入浴や食事の介助では、どうしても密に接触する。マスクを長時間着用できない人もいる」
「手指消毒や食事の際のついたてなど、いわゆる対策は取っていたが、それでも不十分だったのか。どこまでやればいいのか……」
「対策不足と言われるが、対策はしていた。クラスター発生後は、仕事にならないほど、ひっきりなしに誹謗(ひぼう)・中傷の電話があった。どうにもならない」
読売新聞 2021/02/06

100人以上のクラスターが発生した島根県の高校では、ひっきりなしに抗議の電話が入り、通常の教育活動が全くできなくなったということもありました。また、根も葉もないデマや悪意のある書き込みがSNS上で出回り、その高校の生徒たちは街を歩くことすら出来なくなったそうです。

胆沢中生は、3月にエッセンシャルワーカー(国を維持する最低限の社会インフラに必要な不可欠な労働者)の方々に感謝のメッセージを届けました。生徒たちには、「コロナに感染した人に対して偏見を持ったり、差別的な言動や行動をとったりしてはいけません」という思いがあります。今必要なのは、いがみ合うことではなく、互いを思いやり助け合うことです。コロナ禍における生き方について、是非ご家庭でも話題にさせていただきたくお願いいたします。